

令和4年度 公立鳥取環境大学
一般選抜後期日程 試験問題

小 論 文
(経営学部 90分)

(注意事項)

1. 試験開始の指示があるまで問題を開けてはいけません。
2. 問題冊子は3ページ、解答用紙は2枚です。
3. すべての解答用紙の所定欄に氏名、受験番号を記入しなさい。
4. 解答用紙は横書きです。
5. 試験終了後、問題冊子及び下書き用紙は持ち帰りなさい。

※ 解答する際の注意事項

句読点、「」、()も1字と数える。段落変えを行わずに詰めて書くこと。

問題 I

次の文章を読み、設問に答えなさい。

今年の1月、北海道のある牧場が若い夫婦に継承された。譲った経営主は、自らも40数年前に前の経営者からこの牧場を譲り受けた。やばな話だが、譲った値段をきくと彼が買った当時とほとんど変わらないという。

普通の資産は経年劣化し、40年も経てば価値はなくなってしまう。もちろん、牛舎のメンテナンスをし、トラクターなどの機械類も更新しているが、何十年も一つの家族を豊かに支えた上で、なお同程度の「価値」を持っているということに驚かされる。

しかも、実際は「同程度」ではない。糞尿の中に空気を入れる「切り返し」で熟した堆肥を農地に還元し続けた結果、地力はむしろ高まっている。

牛も一頭一頭は入れ替わっているものの、群れとしてみれば牧場の草をよりよく利用できる方向へと成長している。農業の営みの中では時間は過ぎていくものではなく、蓄積していくものなのだ。

太陽のエネルギーや土中の微生物たちのおかげで、土地と牛が時間とともに蓄積していく豊かさ。酪農を営む人間は、この一部を仕事に応じて分けてもらっているのだ。

しかし、こうして豊かさを蓄積してきた牧場が、そのままの形で継承されることは実はめずらしい。後継者不在の牧場は、近隣の牧場に土地だけが買われ、化学肥料をベースとした短期的な成果を求めるやり方で利用される場合が多い。

豊かさを蓄積するスピードはとてもゆっくりで、1人の経営者の人生で蓄積できる豊かさはそう多くはない。「持続可能な農業をめざす」ということは、そうした長い時間軸のなかで、農業のあり方とそれへの人間の関わり方を考えることなのである。

(出典：朝日新聞 2021年5月29日土曜日朝刊「経済气象台 豊かさの蓄積」)

設問：筆者が下線部のような印象をもった理由について、170字以内で説明しなさい。

問題Ⅱ

次の文章を読み、各設問に答えなさい。

「教養とは何か」については、さまざまな論が展開されていますが、その中で私が注目している三つの論を紹介しましょう。

一つ目、「教養とは、分化した知識をつなげてつながりのある知識にすること」です。

第1章の「分化した知識をつなぎ直す」でも少し触れた、十八世紀のフランスで広がったエンサイクロペディアの考え方です。

理科系、文科系、〇〇学、△△学などと、学問はどんどん分化し専門化していくものですが、自分が学んでいる学問や専門のことしか知らないままでは、世界を知ったことにはなりません。世界を知るためには分化した知識、分かれていた学問をサイクロ状、つまり円環状につなぎ直す必要があります、これこそが教養であるという論があります。また、教養があるとは、そのような態度があり、別の分野に対しても関心があるということです。

たとえば、自然科学を専門的に学びながら社会科学にも関心があるような人たちが、いい仕事をするという考え方です。先にも挙げたMITではこの考え方を大学のカリキュラムに生かし、世界ランクトップとなっています。

日本では残念ながら、政治家が「人文系なんていない」ということを平気で口にしたことがあります。まさしく、教養というものが無いと言うしかありません。

二つ目、「教養とは、関心の発展的システムを持っていること」です。

このように論じたのは、西田幾多郎の門下生として学んだ哲学者の戸坂潤(1900-1945)でした。

関心の発展的システムとはどのようなものでしょうか。いろんなものに関心を持ち、アンテナを立てることです。

「へえ、そんなことがあるの。面白いね。ちょっと調べてみたい」「もっと話を聞かせて」という関心がどんどん発展して、一つのことにとどまらないということ、そしてそれらが頭の中でシステムとしてつながっていく、そのような学び方をすることが教養なのだ戸坂は言いました。

もともと理科系的なものについて関心があっても、「社会によって違うよね」「歴史の中ではどうだったんだろう」などと関心が広がっていく。文科系的なものにも関心があり、人文系でも社会学系でも、それぞれがつながってシステムをなしていく。

前出のエンサイクロペディアは知識をつなげようとしたのですが、知識があまりにも分化しすぎると、その知識全てを知ることは難しい。自分が関心を持ったことから、その関心が発展していくことによって一つのシステムができていく、それが教養なのだ。

私はこれを、エンサイクロペディアの発展形態と捉えています。

そして三つ目は、「教養とは、全体との関係で自分や自分の知識を位置づけること」です。

私が学生の頃、東京大学の教養学部に、学部が発行している「教養学部報」というニューズレターがありました。誰が書いていたかは忘れてしまいましたが、そこにはこのように書かれていました。

「私たちはいろいろな学問を研究している。教養とは、自分が取り組んでいる学問が、学問全体のコンステレーションの中でどこを占めているのかを分かっていることだ」

要するに、学問全体の動きや流れ、その時代の傾向、いまどのように研究されているか、あるいはその学問の特徴などに常に目を向け、全体の知の構造の中で、「私はここをやっている」ということがわかる人だということです。

全体の中で位置づけることができると、「ここがわかったら、こっちもわかってくるのかな」と関連したことに対して予測をすることもでき、「分野が違うけど、あの人の研究は私の研究と似ている。同じようなことをやっているのかもしれない」と気づくことができます。そういう姿勢を教養があるということです。これを読んだとき、なるほどと思いました。

分化した知識をつなぎ直す、関心の発展的システム、全体との関係で自分を位置づける、この三つのことは、表現のしかたが異なりますがどれも共通しています。

世界を知りたい。世界の中で生きている人間と人間の間を知りたい。そして、自分を知りたい。これらが、知というものの根本的な動機です。

それが本当の知になるためには、それらがどのようにつながっているか、自分がいま関心を持っていることは全ての知の中でどのような位置を占めているのかを考えることが必要で、実はそれこそが教養だということなのでしょう。

AI 社会になり、人工知能が、人間の思考をいわば代理してくれるようになると、人間が自分で知った、「このことについて自分はよくわかっている」という知識がどんどん断片化されていく可能性があります。頭の中で深くつながっていかないのです。

(出典：汐見稔幸『教えから学びへ』河出新書 2021年 一部変更)

設問1：筆者が下線部のように考える理由について、150字以内で説明しなさい。

設問2：「教養とは何か」について、筆者の主張や文中で紹介されている事例を適宜引用し、あなたの考えを800字以内で述べなさい。